

野外観察のできる「鳥蝶のイグネ」 —Sanctuary for Birds and Butterflies—の建設

宮城県立ろう学校 保谷 忠良

1 目 的

自然の成り立ちを理解するためには、少なくとも植物と動物の両方からとらえることが必要であるが、実際には鳥類にしる昆虫類にしるその種名を野外において判定することは多くの教師にとって困難なことである。

さらに、野外において動物と出会ったり、近づいて間近に観察したりするということが植物に比べると格段に難しいことは野外観察をする者にとって常に悩みの種になっている。しかしこども達は植物よりも動き回る動物に強い関心を示す傾向にあることは事実である。

鳥が集まる樹木を植えたり、昆虫、特に蝶類を呼び寄せる工夫をしたりして、間近で観察できる環境を作ることにより、これらの困難をいくらか解決できるものと思われる。

そこで、鳥の好む木の実のなる樹木や蝶の集まる蜜源花木を植えて、鳥や蝶の集まる広場 (Sanctuary for Birds and Butterflies) を建設することにした。

一方、最近の農業政策の変化から、各地に減反に伴う休耕田が増え、生産性の低い場所では荒地地となって放棄されている。この様な場所を安全で自然豊かな子どもたちのための自然観察・体験空間につくりかえるという休耕田の活用の試みとしても取り組んでいる。

2 概 要

「鳥蝶のイグネ」の現在の状況は以下のとおりである。

(1) 所在・面積・形状

「鳥蝶のイグネ」の建設場所は、宮城県松島町樽字元手樽の三沢地内にある休耕田の一部で、面積927㎡の湿潤な荒地地である。

ここに樹木を直接移植しても、湿地であるために根の発育が阻害され成長は望めない。そこで、

コンパネ (合板) を使って50×50×45cmの枠を作り、腐葉土や培養土を入れ植栽のための罫とした。これを15個設置した。

(2) 植栽した樹木

ブuddleア (フジウツギ科)

キタテハ、アカタテハ、ミドリヒョウモン、オオイチモンジセセリ、スズメガの一種などの吸蜜が観察された。

花蜜の分泌が良く、チョウ目の各種が飛来する。花の形態上、花冠から蜜線まで口吻を伸ばせる種でないと蜜を利用できないことなどをテーマにして、花と昆虫の適応現象について考えさせる良い教材である。また、花が房状につくので、吸蜜回数や一回の吸蜜時間などの行動をテープレコーダーで記録し時間を測定することができる。

サンショウ、カラスザンショウ、ミカン科の一種 (ミカン科)

アゲハチョウ科には食草としてミカン科を利用するものがある。種によって食草の嗜好が異なっているようで、同じミカン科の植物を並べて植えることによってその違いを観察できるようにした。

隣接した山野にはイヌザンショウ、コクサギ (ミカン科) なども生えている。セリ (セリ科) も普通にありキアゲハとの比較も出来る。しかし、ウマノスズクサはほとんど見られずジャコウアゲハの幼虫の観察はできない。

ミヤギノハギ (マメ科)

夏から秋にかけて蝶形の花が咲き、キチョウ、ルリシジミ、ツバメシジミなどが吸蜜に訪れる。また、キチョウの卵や幼虫を観察することが出来る。

宮城県ではミヤギノハギの茎を筆の軸に加工する伝統工芸があり、植物を利用した郷土の産業の学習につなげることもできる。

ピラカンサ (バラ科)

初夏の花にはミドリヒョウモン、メスグロヒョウモン、キタテハ、ウラナミアカシジミ、ヒメウラナミジャノメなどの各種の蝶が飛来する。蝶の他にもある種のアナカミキリ、ハナムグリ、ハナアブなども訪れ、昆虫類の吸蜜活動の比較や蜜食・花粉食と口器の関係などの観察に発展させること

ができる。

秋の赤い実はヒヨドリなどの鳥の餌になり、野鳥の観察に適している。

ウメモドキ（モチノキ科）

秋に実る赤い実はヒヨドリをはじめいろいろな鳥の餌になり、落果が遅いので冬鳥の採餌を観察することができる。

この他に、主に鳥の採餌用にコムラサキ、アキグミ、ツリバナ、イチジク、ブルーベリーなどを植栽し、蝶の吸蜜用にはイチジク、ユキヤナギを植栽した。

また、宮城県の秋の田園風景であった稲のはせ架けを再現するために、トネリコを植えた。

(3) 管理

建設を進めている場所は、休耕田を利用しているために湿地である。アシヤスゲが生い茂っているので、このままでは子ども達が利用する観察地としては必ずしも最適とはいえない。自然のままの環境を活かし生き物たちのことを考えれば、すっかり草を刈ってしまうことは避けたいと考えている。

そこで水はけを良くするために側溝をほりあげ、木道を設置し観察ルートを作ることを考えている。木道を作ることにより、植栽樹木の花の位置が子どもの目線に近くなり観察が容易になることも期待でき、早急に取り組みたいと考えている。植栽樹木の剪定は年に一回は実施しなければならない。剪定は子どもにとって観察しやすいように枝張りを考えて行い、このような作業にも親子での参加を企画したいと考えている。

3 施設の活用

初夏のピラカンサの花に集まる昆虫を観察し、簡単なスケッチをすることによりチョウ目、甲虫目、ハエ目の特徴を捉えることができ、昆虫の種の多様性に気付くであろう。さらに高学年では餌のとり方と口器の関係を観察することができ、生物の適応について考えることができるであろう。

ピラカンサの花はかたまり状に咲くので、一個体のチョウに着目して吸蜜時間や口吻を伸ばす回数を測定することができる。この時、テーブルコー

ダーを利用して、チョウの行動の様子を言葉で録音しておき、後で再生することによってかなり正確に時間を測定することができる。

同じように、秋にブッドレアの花に来るチョウについても行うことができる。この花で吸蜜しているチョウはかなり間近に接近しても逃げることはないので、細かいところまで観察することができる。

野鳥の観察は季節と時間によって制約されるので、いつでも十分な観察ができるとは限らない。計画の段階で熟慮してプログラムを作成する必要がある。シェルターやブラインドを設置していないので近くでの観察は困難である。したがって、双眼鏡やフィールドスコープなどの使用が望まれる。年間を通して観察することにより、夏鳥、冬鳥、留鳥の入れ替わりなどがわかり、群れの移動やなわばりなども観察することができるであろう。

4 今後の課題

一年間の建設活動の中で、「鳥蝶のイグネ」の基礎を作ることができた。今後はさらに子どもたちが利用しやすいように、木道を設置したり、定期的な草刈を実施したりすること、樹木の補植や剪定などのメンテナンスを継続していく必要がある。

この施設をどのように活用していくかという大きな課題が残されている。地域の子ども会や小学校との連携を取ったり、都会の子どもたちに呼びかけたりすることを考えている。さらに、観察のプログラムを作ることや教師を対象にした研修会を開催してインストラクターの育成を手がけていかなければならない。いつでも誰でも利用できる、開放された施設として大いなる活用を望んでいる。